

## 館林キリスト教会

### デボーションノート（2010年）

2月 1日 今日の通読箇所 ヨナ書2章1～10

「ヨナの悔い改め」

聖書には祈りの記事が多いが、魚の腹の中の祈りは珍しい。その時混沌状態だったヨナが、こんなに整ったしかも詩的な祈りを献げたわけではなく、あとで回想した時の表現だろう。「わたしは言った、わたしはあなたの前から追われてしまった、どうして再びあなたの聖なる宮を望みえようか」。これは我々にも経験のある、「自分が悪くて神から離れた」者の祈りだ。しかし主は彼の悔い改めの祈りを聞いて下さった。「わが魂がわたしのうちに弱っているとき、わたしは主をおぼえ、わたしの祈りはあなたに至り、あなたの聖なる宮に達した」。とあるとおりである。本当に「わたしたちの主の寛容は救いのためである」と、「第2ペテロの手紙」にも言われるとおりだ。

2月 2日 今日の通読箇所 ヨナ書3章1～10

「二ネベの悔い改め」

罪を許され、魚の腹から助かったヨナは、ここで再び主の命令を受けることとなった。彼はこんどは素直に二ネベに行った。二ネベについては「彼らの悪がわたしの前に上ってきた」と主が言われたほど、罪の充満する都会だった。そこに行くとヨナは神の裁きを伝え、悔い改めを勧めたのである。自分の不従順の罪を、いま許されたばかりのヨナが、どんなに新鮮な心で、神の愛の、み思いを告げ、人間の罪の弱さを語ったか。悔い改めを勧告するにせよ、それは厳しいよりも愛と恵みに満ち、いかに彼は声涙ともに下るメッセージを語ったか。その結果二ネベは王様をはじめ、全市民が真剣に悔い改めるに至った。すばらしい事だった。

2月 3日 今日の通読箇所 ミカ書1章1～9

「サマリヤの災い」

「サマリヤの傷はいやすことのできないもので、ユダまでひろがり、わが民の門、エルサレムまで及んでいる」。むかしユダとイスラエルが分裂した時、イスラエルの都はサマリヤに定められ、神殿のあるエルサレムとの断絶を明白にするため、この国の礼拝の対象として、二箇所に「金の子牛」が置かれた。これがサマリヤの墮落の始まりだったが、いまその影響はユダ、つまりエルサレムにまで

及んで、全イスラエルの罪は末期的になった。ミカは、彼らの罪を嘆き、その裁きを悲しみ、「わたしはこれがために嘆き悲しみ、はだしと裸で歩きまわり、山犬のように嘆き、だちょうのように悲しみ鳴く」と自ら言っている。彼もまた「涙の預言者」だったのである。

2月 4日 今日に通読箇所 ミカ書 2章 6～13

「説教はいらない」

昔から「良薬は口に苦し」などと言う。罪と愆にふけるイスラエル人には、預言者の説教は苦手だった。彼らは説教を聞くと罪を指摘されて、恥をこうむると感じたからだ。「彼らは言う『あなたがたは説教してはならない。そうすればわれわれは恥をこうむることがない』」と。また「もし預言者が『わたしはぶどう酒と濃き酒とについて、説教しよう』と言うならば、その人は（歓迎されて）この民の説教者となるであろう」。彼らはそういう話なら喜んで聞くわけだ。しかしエレミヤは警告している。「主の言葉を軽んじる者に向かって、絶えず『あなたがたは平安を得る』と、口当たり良く話す説教者」は、偽預言者だと。

2月 5日 今日に通読箇所 ミカ書 3章 5～12

「偽預言者」

ここに「民をまどわす」偽預言者が出て来る。彼らは十分な報酬を受け、自分の生活が豊かなら「平安」を叫ぶ。しかし報酬をもたらさない者には、やれ「罪を悔いよ」とか「神の裁きを恐れよ」とか、相手が敵でもあるかのように、厳しい説教をする。夜が来る。これは静まって神の黙示を頂く時だ。しかし彼らには「暗やみ」はあっても「主の示し」はない。太陽のような神は見え、彼らは昼も夜も霊的な暗黒の中にいるのだ。しかしミカは自分について、またその説教について、[8節]のように言う。なんとこの大胆と確信の発言だろう。

2月 6日 今日に通読箇所 ミカ書 4章 1～8

「イスラエルの回復」

預言者はいつも厳しくイスラエルの罪と背逆を戒めた。しかし彼らはその回復の預言を語ることも忘れなかった。ここに、やがて罪を悔い改め、神の祝福を回復したイスラエルが、高山のように各国の上にそびえ、多くの国民はここに集って真の神を礼拝し、信仰と道徳の指導を受けるさまが預言されている。さらにイスラエルは各国の争いを調停し、悪い国を罰するので、一切の戦争は終り、世界は平和と繁栄に共存するようになる。世界中に分散して迫害を受けていたイスラエルが、1947年、ふたたびパレスチナに故国を回復したのも、奇跡的な預言の成就だが、まだまだこの預言完成の状態には遠い。しかし主の

寛容と忠実の預言は、遅くても必ず成就する。

2月 7日 今日の通読箇所 ミカ書 5章 1 ~ 15

「ベツレヘムよ」

イスラエル回復の預言が続く。まずその回復をもたらすのはキリストであり、回復のはじめは彼の誕生である。ゆえに2節に「ベツレヘム・エフラタよ、あなたはユダの氏族のうちで小さい者だが、イスラエルを治める者があなたのうちからわたしのために出る」と言われたのだ。これが博士たちの来訪の時、学者によって引用されたのは、よく知られている。また「彼は主の力により、立ってその群れを養い、彼らを安らかにおらせる。今、彼は大いなる者となって、地の果てにまで及ぶからである」。と言われるのだ。前に言ったように、この預言の完成は未来に属する。しかし預言は必ず成就する。我々はイスラエルと教会の上はこの預言が成就し、神の国の来るのを、祈りつつ首を長くして待つのだ。

2月 8日 今日の通読箇所 ミカ書 6章 6 ~ 16

「本当の礼拝」

キリストは言われた「神は霊であるから、礼拝をする者も、霊とまこととをもって礼拝すべきである」と。イスラエルの当時の王侯富豪有力者の礼拝は、献げものを惜しまず、実に豪華だったようだ。しかし神の求め給う礼拝は献げものではなく、キリストの教えと同じく「主のあなたに求められることは、ただ公義をおこない、いつくしみを愛し、へりくだってあなたの神と共に歩むこと」である。6節以下には、主のみ心を無視した有力者の搾取によって祝福を失ったこの国が、かえって産業の荒廃を招いているありさまが記されているのだ。また農業も商工業も同じようだった。

2月 9日 今日の通読箇所 ミカ書 7章 1 ~ 10

「不道德と不作」

くだもの、葡萄などの収穫の時期が来ても、この国においしいものはひとつもない。欲望と不道德が横行して、権力者も指導者も、友人も妻も、息子娘も、誰一人信用できるものはいない。ミカの文章を読むと、現代の日本を見るようだ。病気の症状が昔も今も変わらぬように、神を離れた民族の陥るところは共通なのだろう。しかしミカは絶望しない。国民の罪を自分の罪のように悲しみつつも、自分の預言が成就すること、必ず神の憐れみによるイスラエルの回復があることを信じて疑わない。「わが敵よ、わたしについて喜ぶな。たといわたしが倒れるとも起きあがる。たといわたしが暗やみの中にすわるとも、主はわが光となられる」すなわちこれが彼の信仰だった。

2月10日 今日の通読箇所 ミカ書7章11～20

「城壁再建」

エルサレムの城壁はバビロン軍その他の攻撃で破壊された。住民は捕虜になって異国の地に曳かれた。彼ら亡国の民は諸国の侮蔑と物笑いと迫害の的になった。しかし終末の日にその城壁は再建される。主は羊飼いのように再びその民を牧される。周囲の民は回復したイスラエルを恐れ、エルサレムに日参する。「だれかあなたのように不義をゆるし、その嗣業の残れる者のためにとがを見過ごされる神があるか。神は再びわれわれをあわれみ、われわれの不義を足で踏みつけられる。あなたはわれわれのもろもろの罪を海の深みに投げ入れ、昔からわれわれの先祖たちに誓われたように、真実をヤコブに示し、いつくしみをアブラハムに示される」[18～20節]やがてこのお言葉のとおりには彼らは回復する。

2月11日 今日の通読箇所 ルカ福音書、22：1～13

「最後の晩餐の準備」

いよいよ過越しの祭りの時が来ました。この頃、祭司長たちや律法学者たちは、どうにかしてイエス様を殺そうと狙っていました。その時、弟子のユダの心にサタンが入り、彼はわずかな金で、民衆がいないところでイエス様を捕らえる手引きをすることを約束したのです。イエス様は、この時、弟子たちと一緒に最後の晩餐をとるために、場所を予約しておきました。危険だったのか、場所はあらかじめ告げずにおいて、ペテロとヨハネには「水がめを持っている男」のあとをついていくように言い渡し、使いに出しました。この食事は別れの食事ですが、イエス様はここで新しい契約を与えられました。これが、聖餐式の制定の場面です。だから、この最後の晩餐は、イエス様にとって重要な手段であり、自分の生涯の意義を示し、十字架の死へ備えさせるものでありました。

2月12日 今日の通読箇所 ルカ福音書、22：14～23

「聖餐式の制定」

イエス様はここで「『あなたがたに言うておくが、神の国で過越が成就する時までは、わたしは二度と、この過越の食事をする事はない』、『あなたがたに言うておくが、今からのち神の国が来るまでは、わたしはぶどうの実から造ったものを、いっさい飲まない』」(16, 18節)と宣言された。主イエス・キリストの死を記念する聖餐式の制定がここにある。イエス様はまず杯とパンを取り、祈り、弟子たちに渡された。杯は十字架で流される血による契約であり、パンは私たちのために裂かれたキリストの体を表わすものである。その象徴であるパンと杯にあずかるものはキリストご自身を受け取ることになる。だから、

私たちが聖餐式を大事に守っているのは、キリストが私たちのためにも死なれたことを忘れず、覚えていくためである。

2月13日 今日に通読箇所 ルカ福音書、22：24～38

「捕縛と十字架を前に」

最後の晩餐の席で、自分たちの中でだれがいちばん偉いだろうかと、弟子たちの中に激しい議論が起こりました。これは主を知らない異邦人の考え方です。イエス様は「しかし、あなたがたは、そうであってはならない。かえって、あなたがたの中でいちばん偉い人はいちばん若い者のように、指導する人は仕える者のようになるべきである。」と教えてくださいました。28節で「あなたがたは、わたしの試練のあいだ、わたしと一緒に最後まで忍んでくれた人たちである」とおっしゃり、御国での報いを約束して教えてくださいました。最後まで信仰にとどまり続けることが大切で、幸いだと教えられます。イエス様が民衆に歓迎された時は去り、イエス様が捕らえられる時が近づいていました。36節は剣の時になるという比喩的表現と解釈されています。しかし、この意味を理解できない弟子たちは的外れに答えています。

2月14日 今日に通読箇所 ルカ福音書、22：39～46

「みこころが成るように」

最後の晩餐の後、イエス様はオリブ山に行かれました。弟子たちもついてゆきました。そこは「ゲッセマネ」すなわち油絞りの園と呼ばれ、オリーブの木々が繁茂しオリーブ油の压榨所があったようです。イエス様の日常の祈りの場でもありました。イエス様の十字架の死は、神様から離れた人間が裁きと滅びから救われるためであり、イエス様にあって永遠の命を受けて生きるためでした。イエス様は、ご自分が十字架にかかって死ぬことは、父なる神様の御心だと充分に知っておられました。そのイエス様が「父よ、みこころならば、どうぞ、この杯をわたしから取りのけてください。」と祈らずにはいられないほどの苦しみだったのです。御使いが力づける必要があるほどであり、「苦しみもだえて」祈るイエス様の汗が血のしたたりのように地に落ちたほどでした。「しかし、わたしの思いではなく、みこころが成るようにしてください」と十字架への道を歩まれたのです。

2月15日 今日に通読箇所 ルカ福音書、22：47～53

「ユダの接吻による裏切り」

47節以降は、イエス様の逮捕の場面である。ユダの接吻で裏切りが証明される。これはユダの罪が意識的な罪であることを告げている。私たちには無意識

に犯す罪がある。気づかないで相手を傷つけてしまうことがある。しかし、ユダのこの場合は意識的な罪である。だからイエス様は、それと知って「ユダ、あなたは接吻をもって人の子を裏切るのか」と言葉をかけられた。それを聞いていたペテロが剣に手をかける。人から裏切られた時にショックを受け、またそれを暴力で解決しようとするのが人間である。しかしこれは、イエス様の意図ではなかった。イエス様は闘争を好まないで、自分の使命を果たそうとされた。そして、これが預言の成就であることを弟子たちに悟らせる(マタイ 26 : 52 ~ 54 参照)。そしてイエス様は、この時ペテロが傷つけた兵士を癒される。そこには真の救い主の姿が現わされている。

2月16日 今日に通読箇所 ルカ福音書、22 : 54 ~ 62

「イエス様のまなざし」

ペテロの生涯の最大の失敗は、彼が大祭司カヤパの中庭で、主イエスの弟子であることを三度も否定したことである。しかし、ペテロの否定は、イエス様の苦しみに苦しみを加えるようなものであったとしても、そのことはすでに予告されていたことであった(22 : 34)。イエス様はペテロのために信仰がなくならないように祈った(22 : 32)。イエス様は、鶏が鳴くのを聞いて中庭から逃げて行くペテロを振りむいて見つめられた。このようなペテロをも、イエス様は見捨てず、優しいまなざしで彼を見つめられたのだ。この「イエス様のまなざし」がペテロを絶望から救ったのである。新聖歌 221 番の 2 節には、「ああ主の瞳 眼差しよ 三度わが主を否みたる 弱きペテロを 顧みて 救すは誰ぞ 主ならずや」とある。

2月17日 今日に通読箇所 ルカ福音書、22 : 63 ~ 71

「あなたがキリストなら」

イエス様は神の御子ですから何でも知っておられます。たとえば、イエス様を監視していた人たちは、イエス様を嘲弄し、打ちたたき、目かくしをして「言いあててみよ。打ったのは、だれか」ときいたりしたのですが、イエス様は彼らの心の中までも何でも知っておられたのです。彼らがイエス様を神の御子と全く信じていなかったのだと、この行為からよくわかります。ユダヤ議会にイエス様を引き出した人々は「あなたがキリストなら、そう言ってもらいたい」と問いただしていますが、イエス様は彼らにこう言われました。「わたしが言っても、あなたがたは信じないだろう。また、わたしがたずねても、答えないだろう。」と。69 節は詩篇 110 篇 1 節の成就です。イエス様は十字架で死なれ、三日目によみがえり、昇天なさり父なる神様の右の座につかれた神の御子、救い主キリストです。

2月18日 今日の通読箇所 ルカ福音書、23：1～12

「ピラトとヘロデ」

祭司長や律法学者たちが、どうにかしてイエス様を殺そうと計っていたのは、過越の祭が近づいたころでした。ユダの手引きによってイエス様はゲッセマネの園で捕らえられユダヤ議会で裁判が行われました。「では、あなたは神の子なのか」この質問に「あなたがたの言うとおりである」とイエス様はお答えになりました。すると彼らは「これ以上、なんの証拠がいるか。われわれは直接彼の口から聞いたのだから」と、ユダヤ人の長老、祭司長、律法学者たちは決定的証拠をつかんだという勢いです。あとはユダヤを統括していたローマ帝国の権威において死刑執行許可を得ればよいのです。ローマ総督ピラトは「わたしはこの人になんの罪もみとめない」と言い、ガリラヤとペレヤの国主、ヘロデ・アンテパスは興味本位でした。イエス様を追い詰めるのに躍起になっていたのは、ユダヤ人たちでした。

2月19日 今日の通読箇所 ルカ福音書、23：13～25

「民衆の声に負けたピラト」

ピラトは相当な暴君だったが、著者ルカは比較的好意的にピラトを描いている。彼はイエス様を有罪にしたくなかったらしく、4回も無罪宣告をし、釈放するように3回も提案している。逆に、ユダヤ人の罪が強調されている。「十字架につけよ」の叫びは反復され、「その人を殺せ。バラバをゆるしてくれ」(18節)と懇願している。そのバラバは、「都で起こった暴動と殺人とのかどで、獄に投ぜられていた者である」(19節)。23節に「その声が、勝った」とあるのは残念である。ピラトがこうして民衆の声に負けたのは、ユダヤ人の暴動の恐ろしさを何回も経験したからだろう。また、ローマ帝国には、地元民から上訴する権利が認められており、ユダヤ人が、これを利用して、ピラトを脅迫した事が考えられる。イエス様の処刑同意も、ピラトの臆病により決められてしまったのである。

2月20日 今日の通読箇所 ルカ福音書、23：26～31

「ヴィア・ドロローサ(悲しみの道)」

この箇所は、イエス様が十字架を負って歩まれた「ヴィア・ドロローサ(悲しみの道)」について記されている。著者ルカは、クレネ人シモンと泣き女について記している。

まずシモンが十字架をかつぐ記事がある。彼は十字架を傍観しないで無理やり担がされた。ローマの兵隊たちにとっては、イエス様に同情して荷を軽くしてやりたいからシモンに担がせたのではなく、早くイエス様を殺したいからだろ

う。しかしシモンにとっては、この体験は恩寵となり、後に有力なクリスチャンとなる。次に、「悲しみ嘆いてやまない女たち」(27節)とは、十字架刑を要求した民衆と同じ仲間の人たちでしょうから、大声で泣きわめく女たちは、いわゆる葬式用泣き女の真似をしているのだろう。31節の「生木とは」イエス様のことである。枯れた木は私たちである。これは「イエス様でさえ十字架刑に処せられるのであれば、枯れた木である私たちはもっとひどい仕打ちがある。だから気をつけなさい」との警告だろう。

2月21日 今日に通読箇所 ルカ福音書、23：32～49

「十字架上の祈り」

されこうべ、ゴルゴタ、と呼ばれる処刑場には、共に十字架につけられた二人の犯罪人、死刑執行のローマの兵卒たち、役人たち、民衆などが、十字架上のイエス様を取り巻いていました。イエス様のとりなしの祈り、「父よ、彼らをおゆるしてください。彼らは何をしているのか、わからずにいるのです」。十字架上のひとりの罪人への約束のお言葉「よくっておくが、あなたはきょう、わたしと一緒にパラダイスにいるであろう」。息を引き取る直前のお言葉「父よ、わたしの霊をみ手にゆだねます」。が記録されています。何をしているのかわからずにいる、それが人間の姿、自分の姿なのです。イエス様は十字架上で祈り、今もとりなし続けてくださいます。イエス様の十字架の死によって救いの門が開かれました。主を信じる者を御国に導いてくださるのです。

2月22日 今日に通読箇所 ルカ福音書、23：50～56

「アリマタヤのヨセフ」

アリマタヤは地名で、サムエル記上1章1節の「エフライムの山地のラマタイム・ゾピム」と同じ場所だそうです。エルカナやハンナが生活した場所、サムエルが誕生した場所です。現在はレンティスと呼ばれているそうです。アリマタヤ出身のヨセフは議員でした。サンヘドリンと呼ばれるエルサレムのユダヤ人議会の議員の一人でした。サンヘドリンはユダヤ人の最高法廷で、最高行政機関でもありました。彼は「善良で正しい人」で「神の国を待ち望んでいた」のです。また「議会の議決や行動には賛成していなかった」のです。すなわち、イエス様に対する決議や、これにかかわる議会の一連の行動に同意していなかったのです。52節、53節の彼の行動は大胆でした。弟子たちでさえ恐れて身を隠していたのですから。イエス様に対する信仰は彼の行動に表れました。彼自身にも、周りの人々にも信仰の確認と証しするときとなったでしょう。



2月23日 今日の通読箇所 ルカ福音書、24：1～12

「よみがえられた主」

週の初めの日、夜明け前の暗いうちに女たちは香料を携えて、イエス様が葬られている墓に出かけた。彼女たちの心配は、あの大きな石をどのようにとりのけようかということだった。彼女たちはイエス様がよみがられたとは夢にも思っていない。ところが墓のそばに来て見ると、墓の石が転がり、入り口はあいていた。驚いた彼女たちは、墓の中に入って見るとイエス様のからだは見当たらなかった。彼女たちが途方にくれていると、御使いが現れ「そのかたは、ここにはおられない。よみがえられたのだ」(6節)と言った。それから彼女たちが御使いに告げられたのは、イエス様の十字架の死と復活を思い出しなさいということだった。十字架と復活を信じる者は、罪と死から完全に解放されるのである。人はこの問題が未解決のままに決して有意義な人生は送れないだろう。

2月24日 今日の通読箇所 ルカ福音書、24：13～32

「エマオの途上のキリスト」

二人の弟子が、エルサレムからエマオという村までの道を悄然と歩いていた。弟子たちにはこの数日間の出来事が走馬灯のように行き来している。彼らがイエス様の弟子になってから確かに新しい生活が始まった。しかし、彼らの先生が予期しない十字架にかけられ、死んで葬られた今、彼らには幻滅の悲哀しかない。なぜ、イエス様のような立派なお方が死ななければならなかったのか。二人は、イエス様について思い巡らしながら論じ合い、歩いていた。すると、そこによみがえられたイエス様が近づいて、一緒に歩いて行かれた。そしてイエス様は、旧約聖書全体から、ご自身について語られている事柄、すなわちキリストは必ず苦しみを受け(十字架)、栄光に至ること(復活)について説きあかされた。また彼らはイエス様がパンを裂くのを見て目が開かれ、確かにイエス様がよみがえられたのを知ったのである。

2月25日 今日の通読箇所 ルカ福音書、24：33～53

「主は、ほんとうによみがえって」

ルカによる福音書は喜びの福音書とされています。マリヤに対する受胎告知、マリヤの賛美歌に続き、主のご生涯と主にお会いした人々、数々の喜びが記録されています。最後の章には、驚き、戸惑うほどの喜びに与った弟子たちの様子が記されています。なぜなら、十字架にかかって死に、墓に葬られたキリストがよみがえって、今、目の前に生きておられるからです。主は話しかけ、驚く弟子たちに焼き魚を食べて見せてくださいました。最後の節には「非常な喜びをもって、...神をほめたたえていた」とあります。主が語られたことは、これから進められるキリストの働きに弟子たちも豊かに用いられる遠大な計画でした。そのために大切なことは、主がお与えくださる聖霊を待ち望むことでし

た。

2月26日 今日に通読箇所 ナホム書1：1～11

「神を侮るもの」

「ナホムーン」は「慰める者」の意味だが、聖書中にこの預言書の著者として、ただ一回しか名前が出ない、言わば有名でない預言者だ。神は信じ従う者に対しては「主は恵み深く、なやみの日の要害である。彼はご自分を避け所とする者を知っておられる」。と言い、従わない者に対しては「しかし、彼はみなぎる洪水であだを全く滅ぼし、おのが敵を暗やみに追いやられる」。などと言われる。明暗はくっきりで、むしろこの章は神の裁きを強調するようだ。世には昔も今も、神が即座の裁きを猶予していることに油断して、神を侮り、罪を犯して平然たる者が多い。我々は彼の預言をとおして、神を畏れ、敬虔な生涯に導かれることが必要なのだ。

2月27日 今日に通読箇所 ナホム書2：2～12

「二ネベの滅亡」

我々は、エレミヤ書やエゼキエル書において、罪を犯したイスラエルに対する神の裁き、外国軍の侵入による惨状の記事を読んできた。しかし調子に乗ってイスラエルを苦しめた諸国は、実際にはイスラエル以上の偶像国で、不道徳に満ちた国だった。やがて彼らの上には、さらに厳しい神の裁きが臨むのである。ここには古代の強国アッシリアの都二ネベの滅亡の様子が記してある。本当に世界は攻めつ攻められつ、今も戦争の絶え間がない。しかしここには、「主はヤコブの栄を回復して、イスラエルの栄のようにされる」と、終末のイスラエルの回復が記してある。終末の時に、神による世界の決算が行われ、やがてイザヤの言う神の国、「剣を打ち変えて鎌にする」全世界の一致と平和がもたらされるのだ。

2月28日 今日に通読箇所 ナホム書3：1～10

「順境の傲慢」

アッシリアの都二ネベは、強大を誇り、諸国を征服し、諸国民を苦しめた。世界中に恨みの声が起こっても、勢いづいた彼らは意に介しない。それは盛時のヒトラー、スターリンの如くだった。イスラエルも彼らの乱暴に苦しんだ。しかしその栄光は決して永遠には続かない。これもまた、ヒトラーたちと共通だ。(3章7節)「すべてあなたを見るものは、あなたを避けて逃げ去って言う『二ネベは滅びた』と。だれがこのために嘆こう。この章はほとんど彼らの滅亡の歌だ。個人も教会も、順境にいい気になって傲慢に陥ることなく、罪を避け、神を崇めつつ、敬虔な生活に進まなければならぬ。案外順境にも危険があるからだ。